

仮称:X場の正体は?(4)

渡辺 満 (静岡県)

§0 はじめに

神は言った「始めに波動ありき」。

この実験をやっていると、本当にそういう気持ちになってくる。

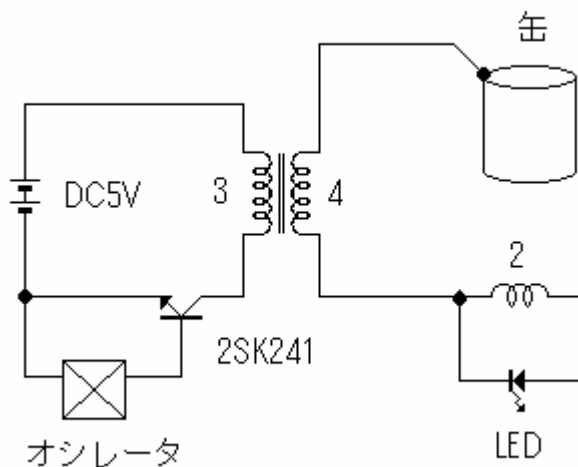
その後、前回(3)の実験を、もっと簡略化できることに、気がついた。

今回は、それについて述べる。

「X共振,X粒子,X波,X流体,X放射」などの言葉を、X場の別表現として、適時使用する。

(たぶん、これがテスラ波だろう)

§1 コイルと回路



コイル3/4は、前回(2)で用いたのと同じトランス。

コイル2は、前回(2)で用いたのと同じ、導線を輪状(直径 4cm)に 13 回巻いた簡単なもの。

このコイル2の使い方は、今回初めてだが、例によって、オシレータから高周波電流を流し、周波数を変化させていくと、この回路でも、ある周波数ポイント(約 4.8MHz)でLEDは点灯した。このポイントを、この回路の‘固有振動数’と呼ぶ。

この回路について気が付いたことを、簡単に述べておくと、

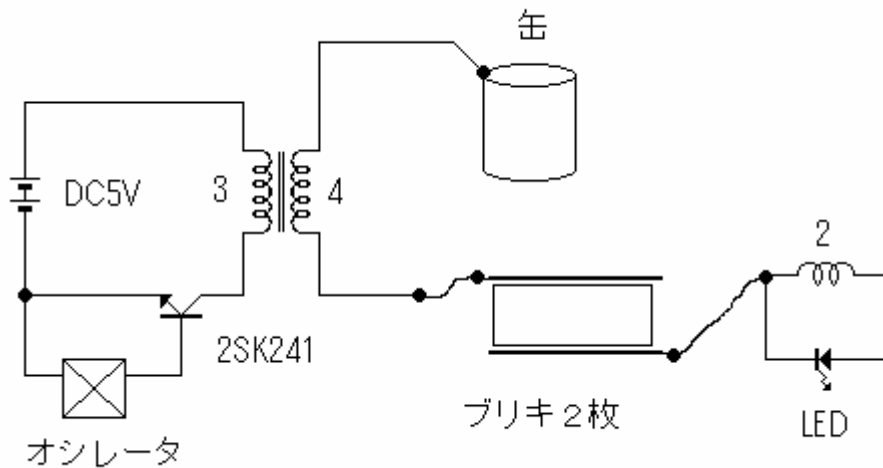
- ・ コイル2は、ここに記した(13 回巻き)の場合が、LED がもっとも明るく、

大きなインダクタンスのものにすると、LEDは暗くなった。

・ 缶を大きなものに替えると、固有振動数が小さい方にずれた。

これは、缶がXのコンデンサとして機能していることを、暗示している。

§2 透過実験



次に、この回路に、洋菓子の空き缶から切り取った、ブリキ板(80mm×150mm)を2枚用意し、クリップ・コードを用いて、図のように、これを回路に接続した。

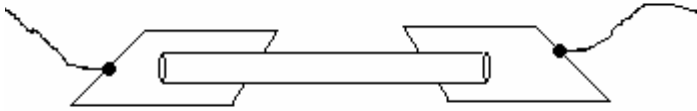
まず、2枚のブリキ板に何もはさまずに重ねておき、オシレータから高周波電流を流し、ある周波数ポイントでLEDを点灯させた。

次に、このブリキ板の間に、適当な木片をサンドイッチ状にはさんだ。

すると、間隔が10数cmまでは、LEDは点灯した。(間隔が大きいほど、LEDは暗くなった。)

すなわち、Xは、このブリキ板の間に10数cmの間隔があっても、それを透過するらしい。

ブリキ板の間が開き過ぎても、その上に無造作に鉄パイプなどを置けば、LEDは点灯した。



これらを元に、 X のイメージを造るのはむずかしいが、音波に似ていると考えると、近いような気がする。ただ、それは電気を有している。

特徴をまとめると、

- ・ 電気の導体は、同時に X の導体である。
- ・ 電気の不導体であっても、透過度は落ちるが、ある程度なら伝播する。
- ・ 空気中も伝播する、真空中は不明。
- ・ 人体は、 X のよい導体である。

§3 人体の影響

これらの実験は、常に手(人体)の影響を受ける。

今の場合、手をブリキ板に触れたり、近づけたりすると、LED は点灯しないことがある。
(手を遠ざけると、点灯する)

SF ならたぶん、‘生体反応あり’ みたいなことを、言うのだろうが・・・。

人体が近くにあると、回りの場が変化し、回路が、それに反応するのだろう。

しかし、その影響の現れ方が複雑で、単純ではない。

手を近づけると LED が消えるだけでなく、逆に、手を近づけると LED が点灯する場合もある。
それだけでは、済まない。

手を近づけると LED が点灯し、さらに近くしていくと、今度は消える、という厄介な場合もある。

場が目に見えたら、本当に助かるだろうが、「ファラデーさん、どうする？」

2013 年 6 月発行 V1.0

著者: 渡辺 満, 発行者: 渡辺 満

Copyright 渡辺 満 2013 年